愛しいキミとの鬼ごっこ

紅月　蓮珂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
愛しいキミとの鬼ごっこ

【Ｎコード】
Ｎ６４２９Ｊ

【作者名】
紅月　蓮珂

【あらすじ】
とある科学が発展した綺麗な国でのお話。
一人の科学者と、人形の鬼ごっこのお話。
楽しい楽しい、エンドレスストーリー……

プロローグ

狭い狭い世界の中

眩しい眩しい光を受けて

ねえ、いつ終わるの？
貴方と僕の鬼ごっこ。

ねぇ、貴方は僕が好き？

僕のこと、好き？

好きだよ。大好きだよ。

この上ないくらい大好きだよ。

だったらどうして、こんな事するの？

僕のこと、嫌いなの？

それはね、君が、君のことが

これ以上ないほど可愛いからさ。

広い広いこの世界

深い深い闇の中で

さあ、始めよう。

キミと俺との、終わることのない鬼ごっこを。

――キミが、大好き

――だからもっと、キミの本当の姿を俺に見せて

――貴方が大好き

――だからお願い、もう僕を自由にして

キミと俺は、絶対に離れられない。

だから逃げて。

悲鳴を響かせて、逃げて。

第1話　鬼ごっこ、スタート

僕は、貴方が隣にいてくれれば、それでよかったんだ。

僕は、貴方が笑ってくれれば、それでよかったんだ。

貴方からの愛以外、いらなかったんだ。

なのに・・・・・・どうして？

どうして、こんなことするの？

貴方は僕のこと・・・・・・嫌い？

鬼ごっこ、スタート

とある研究所の一室。
足の踏み場が無いくらい書類が散乱し、コードがこんがらがった状態で放置されてる機械が多々有る部屋。
一人の男と、性別が分からなくなるほど美しい人間がいた。
男は椅子に座り、部屋の中央にポツンとあるデスクにだらしなく足を乗せ、資料を見ている。
性別不詳の人間は、デスクから少し離れた、それだけ異常に綺麗なソファーに寝転がり、暇を持て余していた。
そんなとき、男の飲んでいた珈琲が無くなった。
「・・・・・・珈琲おかわり」
「あ、はい」
性別不詳の人間は嬉しそうに返事を返し、ソファーから立ち上がる。
そして二人の間に散乱し山となっている書類を、まるで存在しないものの様にスイスイと避けながら近寄る。
性別不詳の人間がデスクに辿り着き、カップを持って行こうとしたとき、
「あ、今度は砂糖とミルク入れないで」
男から注文が付けられた。
「え？でも白浬は、ブラック飲めないじゃない」
「・・・・・・飲んでみたくなったの」
性別不詳の人間に白浬（はくり）と呼ばれた男は、少しふてくされながら反論をした。その反論に性別不詳の人間は苦笑を返した。
「苦くても知らないよ？」
「別にいい」
「ふふ、強がっちゃって。あ、ちなみに、残すのは絶対に駄目だからね？」
「なっ！？」

白浬は性別不詳の人間の言葉に、椅子からずり落ち、資料を散乱させた。そのせいで、元から寝癖とくせっ毛でボサボサの髪が、余計にボサボサになった。

「ちょっ、ベィト！！」

「だ～め」

ベィトと呼ばれた少女にも少年にも見える少年は、可愛らしい笑みを浮かべ、白浬から遠ざかっていく。白浬は慌て、ベィトを追いかけようとするが、

「むぎゅっ！！」

長い白衣の裾を踏んで転んだ。

ここは００１ドール研究所。

この世界で初めて出来た『ドール』の研究所だ。

『ドール』とは、人造人間のことを言う。『人造人間』では長いので、『ドール』と呼んでいる。『ドール』は見た目は人間と瓜二つで、中々見分けがつかないが、戦闘能力が異常に高く、体力も腕力も人間離れをしている。だがドールは戦闘道具として扱われるよりも、名前の通り人形として扱われることの方が多い。人間の代わり・奴隷・欲求の解消など、『人形』として扱われる。その訳は、初めてドールを作った科学者が、ドールを人形として扱ったからだという説がある。こうしたこともあり、ドールは世界中に普及されていった。

そして、その最初にドールを作った天才科学者が・・・

「ベィト～・・・助けて～・・・・・・」
自身の研究室で白衣を踏んで転んでいる、藍澤（あいざわ）　白浬（はくり）だ。
そして、その白浬が作り上げた最高級のドールが、白浬の側に常にいるベィトだ。

こんな平和な日々が、ずっと続くと思っていた。
この人と、ずっと笑い合えるのだと思っていた。
僕の知らない顔があるこの人を見るまでは……

ある日ベィトは、白浬に頼まれ、資料庫に大量の資料を取りに行っていた。
白浬が頼んだ資料は予想以上に多く、持ち運ぶのが少々困難だったが、白浬のためならと、ベィトは全てを両手に抱えて資料庫を出た。
そして廊下を千鳥足で歩いていると、微かに聞き覚えのある声がした。
「……ぁから、……って」
本当に微かで、通常の人間ならば聞こえないような大きさだっ

たが、ベィトはドールだ。人間の何倍も聴力がいい。そのため、ベィトには聞こえた。
「……白、浬？」
通常、白浬が何をしようとも驚かないベィトだが、今回は違った。
何故なら、
「何で……僕に何も、言わない……の…？」
白浬がベィトに、何も言わずに部屋を出ていたから。
ベィトにとってみればそれは、信頼を失ったのと同じことだった。白浬には一番信頼されている、そう思っていた気持ちが裏切られたと、ベィトは感じてしまう。ベィトの心の拠り所は、白浬しかなかった。ドールであるベィトには、自分を造り愛してくれた白浬しかなかった。
ショックを受けたベィトは、持っていた大量の資料を床に落としてしまった。
「誰だ！？」
「っ！！」
白浬がいる部屋から、怒鳴る女の声が聞こえた。その声にベィトはビクッと反応し、資料を集めようとした。
「・・・ベィト？」
その女の声に反応し、部屋から白浬が出てきた。だが、あまり驚いていない様子だった。
「っ！！　・・・・・・は、い」
「どうしたの、こんなところで。君には資料を取ってきてって頼んだはずだよ」
「え・・・っと・・・その・・・・・・偶然、ここの前を通りかかって・・・」
ベィトはカタカタ震えながら、白浬の質問に答えた。目はキョロキョロと動き、汗が浮かんでいる。
「ふぅ～ん」

そう言った白浬は、口端を上げ、不気味な笑顔を浮かべていたが、下を向いていたベィトは気付かなかった。その笑顔のままベィトに近づき、ベィトの顎を指で持ち上げた。

「！？」

ベィトはその行動に、ただ驚くばかりだった。

「そう、その顔」

「？」

言葉の意味が分からず首を傾げるベィトに顔を近付け、白浬はその笑顔を深めた。

「もう、たまんない」

「・・・・・・・・・・・え・・・・」

「すっごい可愛いよ、ベィト。もう食べちゃいたいくらい」

「はく・・・・り・・・・？」

白浬の言葉に底知れぬ恐怖を感じたベィトは、白浬から逃れようとする。だが意思に反し、体は動かない。恐怖のせいで体が硬直してしまったのだ。

白浬は顎を掴んでいた指を動かし、喉へと滑らせる。その指は、まるで割れ物を扱うようだった。

「ねぇ、ベィト」

「・・・・・・・・・・・・・・」

「俺から逃げて」

「・・・・・・・・え・・・・？」

ショックすぎる言葉を告げられ、ベィトは目を見開く。

「俺から逃がしてあげる。その代わり、俺と鬼ごっこしよう」

「おに・・・・ごっこ・・・・？」

「うん。悪い条件じゃないでしょ？」

これが、始まりだった。

僕とあの人の、鬼ごっこの。

第1話　鬼ごっこ、スタート（後書き）

話の進むペースが極端に早くてごめんなさいｏｒｚ
文章力に乏しいもので・・・・・・。
次はベィト目線でのお話です。
白浬はほとんど出て来ません。
・・・・・・多分←

第2話　出会い

逃げなきゃ

逃げなきゃ

あの人から、逃げなきゃ

出会い

吐く息が、白く染まる寒空の下。
ベィトはただひたすら、走っていた。
周りから奇妙な視線を向けられても、意にも介さずに走っていた。
「あっ！」
そのため、誰かにぶつかってしまった。
相手は男のようで、酒とタバコの匂いが鼻をついた。
「おっと、ちゃんと前見て走れよ」
「す、すみません」
「・・・・・・お前、何て格好してんだ？」

男はベィトの服装に目を留めた。その顔は、いやらしく笑っている。
「っ！！」
咄嗟に危険を感じ、男の腕をすり抜けて、ベィトは逃げる。
「おっ、おい！待てよ！！」
男の声に振り向きもしないまま、一目散に逃げていく。その声が聞こえなくなるまで、遠くに。

誰もが目を留めるベィト。
問題は、顔の美しさだけではない。ベィトの服装なのだ。
研究所で着ていた学生服のようなものではなく、布一枚。足も裸足で、その肌の白さを際立たせている。
こんな格好をしているせいで、先程からベィトは怪しい男達に目を付けられていた。
持ち帰って自分の奴隷にするも良し、売り飛ばして金にするのも良し。
そういった類の考えが、男達の頭に浮かんでいた。
だが、中々実行に移せない。実行しようとしても、その考えを上回る速さでベィトが逃げるためだ。
ベィトは人間ではなく、ドールだ。人間よりも身体能力が優れている。だからベィトは、今のところは難を逃れていた。

だがそんな時間も、長くは続かなかった。
「はぁっ、はっ・・・・・・はっ・・・」
何とか人気のない廃ビルの中に入り込むことができ、息を整えていた。
少しの休息の時間にベィトが気を緩めた時、

「誰だ？」

人の気配が『全く無かった場所』から、少し野太い男の声が聞こえてきた。

「っ！？」

当然のごとく驚いたベィトは身を固くし、息を潜めた。

ドールである自分に『全く』気配を感じさせない存在。相手もドールであるならば可能だが、ドールにはドールだけが感じられる波長というものがある。それが感じられないということは、相手は人間だ。しかし人間でそんなことが可能ということは、かなり強く、恐ろしい存在ということになる。

「そこにいるのは誰だって聞いてんだよ。存在がバレてんだから、とっとと名乗れ」

口調は荒っぽく、しかしどこか威厳を感じさせた。ベィトから放たれる殺気を感じ取ったのか、相手からも静かな殺気を感じられた。遠く離れていても全身を突き刺されるような痛みを感じるほど、その殺気は強かった。

「・・・・・・っ」

今まで感じたことのない強い殺気に脅えながらも、ベィトは口を開こうとしなかった。相手もベィトが口を割らないと分かると、小さく舌打ちをした。

「俺に怨みでもあんのか？でも俺はお前みたいな殺気とは会ったことがねぇんだ。っつーことはお前は他人だ。俺はいきなり他人に殴りかかるほど不躾なヤツじゃねぇよ」

何故か一人で淡々と語りだす男の口調は、先程に比べると幾分か柔らかくなっていた。

「だから安心しろ。そんなに脅えるこたぁねえ」

「・・・・・・・・・・・・・」

だが当のベィトは、まだ相手を警戒したまま動こうとすらしなかった。
「・・・・・・あぁ～・・・まだ分かってくんねぇか・・・。でもどうすっかなぁー。俺ってそんな器用じゃないし・・・。だから女も口説けねぇんだよ・・・」
どうでもいいことすら小声（と本人は思ってる声）で呟く。だがその行動がベィトの気を緩めたらしく、
「・・・・・・・べ・・・ぃ、と・・・」
『あの人』につけられた名前を口にした。
「あ？べ・・・ベィト？」
上手く聞こえなかったのか、少し不安げに言葉を返してくる。ベィトはそれにコクリと頷いた。
「ベィトって・・・・・・ｂａｉｔ《餌》・・・か？」
その言葉に頷こうとした。でも、ふいに頭の中を何かがよぎった。自分の名前の意味―――今まで考えたことすら無かった。あの人がつけてくれた名前だから、大切なあの人がつけてくれた名前だから・・・・・・
でも今、あの人は自分にとって、何なのだろう。
快楽の為に自分を造り、痛めつけられた。
信じていたのに、裏切られた。
そんな人が、今でも大切なのだろうか・・・・・・？
「？　どうした？」
「っ！」
男の言葉で我に返ったベィトは、慌てて首を横に振る。
「そうか？ならいいけど」
今度は何度も何度も頷く。首がもげてしまうのでは、というほど激しく。
「そんなにムキになんなって」
ベィトのその行動が面白かったのか、男は「ハハッ」と笑う。その声に敵対心など、微塵も感じられなかった。

「あ、そうそう。お前に俺の名前、教えて無かったよな」
そういえばそうだったと、ベィト自身も今気付く。

「俺の名前はフェイオン。皆はフィオンって呼ぶけどな」

『フィオン』

それが、彼の名前だった。

僕の運命を変えた、彼の・・・・・・

第2話　出会い（後書き）

また遅い投稿ですいません・・・・・・（汗）。
今回は、終わり方に自分でも納得がいってません。
もう少し良い終わり方が出来ればと思うのですが、私の文章力ではそれも叶わず・・・。
何か良い終わり方があれば、アドバイスください。

第3話　『仲間』

ただ

ただ繰り返す

その名を

僕の運命を変えるその名を

ただ、繰り返す・・・・・・

『仲間』

フィオン、フィオン、フィオン、フィオン・・・・・・

何度も何度も繰り返す。ただ無心に、ひたすらに。その名が唯一の助けであるかのように、ただ繰り返す。

「お、おい。どうしたんだ？そんなに俺の名前ばっかり呼んで・・・」

流石に不安になった男――――フィオン――――は、ベィトへ疑問を投げかける。するとベィトは顔を上げ、フィオンを見つめた。その目は、先程までとは違った。全てに恐怖し、全てを拒絶するような光は微塵もなかった。その目にはただ、純粋なまでの信頼が光っていた。

何故出会ったばかりの人間に、こんなにも信頼を寄せるのか。

それはベィトにも分からない。ただ、この男なら、フィオンなら信じられる。フィオンなら、自分を曝け出せる。本能がそう言っていた。

「フィオン！」

「？　まあ確かに、俺の名はフィオンだが・・・・・・それがどうした？」

「フィオン！」

「・・・何をどうしたいんだよ、お前は・・・・・・」

フィオンも、そろそろ呆れてきた。こう何度も何度も自分の名を呼ばれては、照れ臭い。それに、ベィトから向けられる信頼に満ちた視線。

（いつもいつも、何でこう俺はそんな視線ばっかり向けられるかね・・・・・・・）

純粋すぎるその視線は、くすぐったかった。だがその視線のおかげで、フィオンはベィトが現在どんな状態なのか、知ることが出来た。

「おい、ベィト」

「・・・？」

「お前・・・・・・・帰る場所が、ねぇのか？」

自分にそういった視線を向けてくるものは、大抵が路頭に迷ったものだった。家を追い出された、奴隷として働くのが嫌だから抜け出した、家を壊されたなど、様々な理由で帰るべき場所を失った者達だった。そして目の前の少年も、そんな者達と同じ視線を向けていた。

「・・・・・・・・・・・・」
答えることを少々渋っていたベィトだったが、小さく首を縦に振った。
「やっぱりそうか・・・・・・」
フィオンは何度もこんな人達を見てきている。この腐った街では、そんな人間は数え切れない程存在する。だが『流石の』フィオンでも、その全員を救うことは出来ない。
だからフィオンは訊く。
「お前、何か得意なことはあるか？」
「・・・・・・得意な、こと？」
フィオンの突拍子もない質問に、ベィトは可愛らしく首を傾げる。
「そうだ。出来ることでもいい。何かあったら言え」
「・・・・・・・・・・・・」
流石にこいつじゃ理解し難いか・・・？
そう思い、何か違った言い方はないものかとフィオンが思考を巡らせ始めたとき、
「・・・・・・戦闘」
ベィトが重々しく口を開いた。
その声は小さく、少しだけ拒絶の色を孕んでいた。
「戦闘か・・・・・・他には？」
「・・・少しなら、家事とか。あと、書類整理とか・・・・・・性欲、処理とか・・・」
最後の言葉は、明らかに拒絶の色が見られた。
したくない。でも、命令されるなら・・・
「ああ、最後のはいらん。俺には性欲がねぇんだ」
「・・・え・・・・・・？」
フィオンの言葉の意味が、分からなかった。
性欲処理は・・・・・・いらない？
「正しく言うと、俺は性欲ってモンが何だか分かんねぇ。ま、知りたくもないしな」

人間には皆、性欲というものがあるのではないのか？
『生まれた』とき、そう教えられた。
ドールの存在意義の中に、「人間の性欲処理」があったから。実際ベィトも、性欲処理をしたことがあった。科学者の白浬といえど、やはり人間。性欲を持ち合わせていた。
だがベィトは、その仕事だけは嫌いだった。マスターの命令とあらば、従う外に道は無い。それでも、あの気持ち悪さだけは嫌いだった。
でも、その性欲処理が・・・・・・いらない？
「どう・・・・・して・・・・」
「ああ？そんなもん知るかよ。ねぇもんはねぇんだ」
ベィトが信じられないというように尋ねた言葉は、そろそろ面倒臭くなってきたようで、ぶっきらぼうな言葉で突っ撥ねられた。
「でも、そうか・・・・・戦闘、家事、書類整理・・・・・」
先ほどのベィトの回答を、小さい声でブツブツと繰り返す。少し髭の生えた顎に指を添え、思案顔になる。
少し考えたところで結論が出たのか、顎から指を離し、ベィトを見つめる。
「お前・・・いや、ベィト。俺達の仲間になる気はあるか？」
「なか・・・・・ま・・・？」
聴き慣れない単語に首を傾げる。単語の意味なら知っている。だが、その単語を自分に向けて発する『理由』が分からないのだ。
何故、見ず知らずの男にそんなことを言われなければならない？
何故、見ず知らずの相手にそんなことを言う？
二つの疑問が頭の中で混ざり合い、ぐちゃぐちゃになる。分からないわからないワカラナイ・・・・・・
「嫌なら無理にってわけじゃねぇから。でも、お前程の逸材を野放しにしておくのは勿体無いんだ」
「っ！」
真剣な眼差しで見つめられ、何も言えなくなる。相手の気持ちを

優先させている話し方だが、その目は逃げることを許さない。先程までの暖かい眼差しではなく、獲物を見つけた獣のような、獰猛な目付き。その目に射竦められると同時に、その目に魅せられた。

その瞳に、捕らわれたい。

その瞳に、映りたい。

本能が叫ぶ。

ドールであるベィトに本能などあるのか分からない。だけど、体の奥から込み上げて来る何かがあった。

まるで、人間の本能のように。

「・・・・・・どうなんだ？」

「・・・・・・っ」

彼が言葉を発するたびに、体が震える。まるで彼の声に反応するように。

「ぼっ、僕は・・・・・・」

「・・・・・・・・」

ベィトが言葉を発しようとする。だが上手く内容が纏まらないようで、たどたどしくなってしまっている。フィオンはそんなベィトを、ただ見守っている。何も言わずただ、じっと。

「僕は・・・・・・っ」

「・・・・・・・・」

「仲間に・・・・・・なりたい・・・っ！！」

ベィトの初めての願いが、暗い廃屋の中に響いた。

第3話　『仲間』（後書き）

投稿がものっっっっすごく遅くてご免なさい・・・・・・・（土下座）

学校が忙しくて、中々書けなかったんですよ。

しかも内容が超薄いって（泣）。

私の文章力の無さがよ～く見受けられます。

よければ、アドバイスください。

第４話　初めて触れるもの

もう、分からない

ぼくには分からない

人の温かさなんて

人の温もりなんて

だってぼくには、あの人しかいなかったから

もう今は

あの人すらいないから。

初めて触れるもの

「ここ、どこ・・・？」
錆びれた街でフィオンと出会ったベィトは、フィオンに連れられて暗く細い路地裏を歩いていた。そこには、この廃れた街にしてはしっかりと建っているビルの跡地のような場所があった。
訪ねられたフィオンは後ろを振り返り、口角を吊り上げてニッと笑ってみせた。
「俺達の、アジトってやつだ」
「あじ、と・・・？」
「そう、俺達の、」
「やっと帰ってきたのか。おい、そんなとこに突っ立ってないでさっさと中に入ってアタシの仕事を手伝え、このボンクラが」
フィオンの言葉を遮り、いきなり口を挟んできた声は高く、この跡地によく響いた。
「・・・・・・」
「大体お前は何だ。アタシ達のリーダーのくせに一言も声をかけないで出て行くとは。若い奴等なんて『リーダーがいない！！どこ行ったんだ！？りぃぃぃだぁぁぁ！！！！』なんて情けない声を上げて騒いでたぞ。五月蝿いったらありゃしない。この責任はお前がきちんと取れよ。アタシは一つたりとも手伝ってやらん」
フィオンは一言も発していないのに、その声は独りでに言葉を紡いでいた。その様子に呆れたのか、フィオンが耳を傾ける様子はない。
「あー・・・悪いな、ベィト。あいつのことは無視してくれ」
「あいつ、って・・・？」
声の主のことを差されていることは分かるが、いかんせん姿が見えない。あいつと言われても分からない。
「おいフィオン！！聞こえているのか！？」
「！？」
声が先程より近く、大きく聞こえた。その怒鳴り声に驚いたベィ

トは大きく肩を跳ねさせ、素早くフィオンの後ろに隠れた。
「フィオン！？」
「あーはいはい、分かってるって。だから落ち着けよ、なっ、ウィング」
ベィトはフィオンの肩からそろりと顔を出し、近づいてきた声の主の顔、ウィングを確認した。
その人物は、やはり女性だった。金糸のように美しく長い髪を持ち、それに似合う整った美貌、その美貌の中心には琥珀の瞳があった。だが見た目に反してその口調は荒く、少し男勝りだ。
「分かっているのだったら返事をしろ、この馬鹿が」
「馬鹿はないだろうよ、馬鹿は」
「・・・ん？その後ろのちっこいのは何だ」
ウィングはフィオンの後ろのベィトを指した。その視線にベィトは少し驚き、再び肩を跳ねさせた。
「ちっこいのとか言うなよ。余計脅えるだろ」
フィオンはベィトの小さい頭を撫でながら、ウィングに諭す。
「なんだ、また拾ってきたのか。全くお前という奴は・・・」
「悪かったな。それより、こいつだ」
「あぁそうだったな。名前は何と言う？」
先程までフィオンにしか向けられていなかった視線がいきなり自分に向けられ、ベィトは固まってしまうが、その視線に敵意が含まれていないことに気付き、おずおずと口を開いた。
「・・・べ、べぃ、と・・・」
「ベィトね、了解」
ウィングはうんうんと首を縦に振り、了承の意を表した。
「で、ものは相談なんだがな」
「ベィトの服を仕立ててくれ、だろ？」
フィオンの言葉を聞かずにその意を察し、ウィングは返事を返す。
その返事に満足したのか、フィオンは不敵な笑みを浮かべる。
「流石じゃねえの」

「当たり前だ。何年お前と連れ添ってると思ってるんだ。お前の考えることなんて把握済みだよ」
ウィングも不敵な笑みを返し、二人の間で何かの交渉が完了したようだ。だが一人蚊帳の外なベィトは何が何だか分からず、おろおろとしていた。
「あぁ悪い。こいつは俺の部下で、仕立て屋のウィングだ」
ベィトがおろおろしていることに気付き、説明をしてくれる。
「仕立て屋・・・？」
「そう、服を作ってくれるんだよ。お前、何にも着てないだろ？」
そう、現在ベィトは研究所から抜け出したままの格好で、布一枚なのだ。
「いいの・・・？」
「当たり前だ。お前はもう、俺達の仲間なんだからな」
そう言い、頭をぽんぽんと撫でてくれる暖かい手に、ベィトは目を細める。
「じゃあこっちに来い、ベィト」
「・・・は？」
ウィングの突発的な言葉に、ベィトはここに来て一番大きい声を出してしまった。
「服を仕立てるんだ。お前の体のサイズが分からなければ、作るものも作れんだろう」
「ふ、服ならMサイズですが・・」
「そんなサイズ当てにならん。お前の細かなサイズまで分からなければ駄目なんだ」
「こ、細かな・・・？」
「そうだ。だから来い」
「え、ちょ、まっ・・・！」
細くしなやかな腕をしているのに、どこからそんな力が出るのかと思うほど、ウィングは力強くベィトを引きずっていく。
「頑張れよ～」

そんなベィトを見ながら、フィオンはお気楽な笑顔を浮かべて手を振っていた。

「ん？」

十分経ったぐらいに、ベィトが戻ってきた。

「おぅおかえり、ベィト。どうし・・・た？」

そのベィトはどこかやつれていて、布を握り締めていた。

「・・・あぁ、恐かったんだな、ウィングが」

ベィトの状況を理解したフィオンは、下を向いて顔を上げないベィトの頭を撫でた。

そんな二人を、遠くから眺める影があった。

「・・・フィオン」

「お？どうしたザージ。お前が出てくるなんて珍しいじゃないか」

声のした方を向くと、そこにはベィトと同じ様な背丈をした、黒髪の少年がいた。

「変な、気配がしたから・・・」

ザージと呼ばれた少年は、消え入りそうな小さな声で呟いた。

「変な気配？」

フィオンのその言葉に、ザージは首を小さく縦に振る。

「どんなだ？」

ザージの発言に眉を顰め、しかめっ面をしながら訪ねる。その顔に、ベィトは少し脅えてしまう。

「人間じゃ、ないの」

「・・・は？」

ザージの突拍子の無い言葉に、流石のフィオンでも驚いてしまう。

「・・・その、子」

「っ！？」

光を宿さない黒いザージの瞳に見詰められ、本日何度目か分からない怯えを見せた。

「人間じゃ、ない・・・でしょ？」

「・・・・・・」
間違っていないその言葉に、ベィトは何も言えなかった。
「・・・そんなこと、どうでもいいだろ。ここにいる奴は皆、訳ありなんだから」
何も言えないベィトに助け舟を出すように、フィオンが言葉を発した。
「・・・そう、だね」
その言葉に納得したのか、光を宿していなかった瞳に光を宿し、ザージが少し微笑んだ。そしてちょこちょことベィトに近づいてくる。
「・・・な、何？」
先程の怯えがまだ抜けきっていないのか、近づいてくるザージから身を守るようにフィオンにしがみ付いた。
「・・・・・・」
そんなベィトの怯えに気付いていないのか、ザージはベィトの隣に来て、ベィトをじっと見詰める。
よく見ると自分より背が少しだけ小さく、黒い瞳は黒曜石の様に綺麗で、顔は幼く可愛らしかった。そんなザージに見惚れていると、いきなりザージの姿が消えた。
「え・・・っ？」
そして、肩に重みを感じた。
「・・・・・・」
「おっ？珍しいじゃねーか、お前が誰かに抱きつくなんて」
「・・・・・・」
ベィトはいきなりのことに驚いて声も出ない。
ザージはフィオンの言う通り、ベィトに抱き着いていた。ベィトの首に腕を回し、離すまいとしっかり掴まれていた。
「ベィトが気に入ったのか？」
ザージはフィオンの質問に、ベィトの首筋に埋めた頭をぐりぐりと動かせて答えた。

「そうかそうか」
その回答が嬉しかったのか、フィオンは笑顔でベィトとザージの頭を抑えるように撫でた。
「・・・・・・」
自分の首に抱き着くザージ、そして自分の頭を撫でるフィオン。
その二つの暖かさに包まれ、ベィトは幸せそうに笑った。

第４話　初めて触れるもの（後書き）

約八ヶ月ぶりの投稿になってしまいました。
毎回毎回遅くなって申し訳ありません。
ミスやアドバイスなど、宜しくお願いします。

第5話　振り回されて、守られて

温もりを与えられることが怖くて

知らない相手に微笑まれることが怖くて

だって人は表だけじゃないから

裏を見るのが怖かったんだ

振り回されて、守られて

ベィトがザージに抱き着かれ驚きのあまり固まっていると、奥の方から服を持ったウィングが出てきた。

「何だ、もう仕立て終わったのか？えらく早いじゃねーの」

出てきたウィングに気付いたフィオンが話しかけると、ウィングはその流麗な眉を顰めてしかめっ面を作る。だがそのまま何も返さず、ベィトに歩み寄る。それと同時にザージがベィトから離れ、どこかへ行ってしまう。

「あ……」

「ほらよ」
「っ？」
歩み寄ったウィングは持っていた服をベィトに投げ渡した。いきなりのことに驚いたベィトだったが、そこはやはりドールなのか反応が早く、素早く服を受け止めた。受け取った服を広げてみると、それは一枚の白い長袖のカッターシャツだった。変哲もない、ただのカッターシャツ。
「今日はまだ服は仕上がってないんだ。早ければ明日の朝には完成する。でもそれまでそんな布一枚でここを動き回られちゃたまんないからね、最低でも今日一日、そのシャツ着てな」
ウィングの言い分はもっともだ。よそ者が勝手に来て人の居場所を土足で踏み荒らすようなことはしてはいけない。
そのことに同意したベィトが頷こうとしたとき、隣にいたフィオンが口を挟んだ。
「おい、いくらなんでもシャツ一枚はねえだろ。せめて下も貸してやれよ」
「知るか。アタシのとこにあったのはそのシャツ一枚なんだよ。そんなに可哀想だなんて思うなら、あんたが貸してやれば？」
フィオンはこれでもここのボスなのだが、そんなフィオンに対してウィングはこれまで以上にきつい言葉遣いで捲し立てる。徹夜で作業するためか気が立っているようだ。そんなウィングにあきれた表情を返すフィオンは、ベィトの肩にシャツをかけながらウィングに話しかける。
「じゃあ頼むな、ウィング」
「誰に言ってるんだ。私が一晩で仕上げられないわけがないだろう」
少し苛立ち気味だがニヒルな笑みを見せたウィングに、フィオンもニヤリとする。
「そうだな」
「じゃあな。ベィト、寝かせてやれよ」
そう言い後ろを振り向かないまま手を振って、ウィングは奥へと

消えて行った。
「それぐらい分かってるっての。なぁ、ベィト」
「…え？」
いきなり話を振られたベィトは、気の抜けた声を出す。
「いや、何でもない。まぁお前も疲れてるもんな。寝るか」
「そ、そんな疲れてない。僕は、すぐ体力回復するから」
「そう言うな。いくらお前がドールでも寝ることは大事だろ」
フィオンはそう言いながら、ベィトの頭を撫でる。だが撫でたと思ったら、そのまま頭を自身の胸に押し付けた。
「フィオン……？」
「お前はまだ餓鬼なんだ。自分が思ってる以上に何にも知らねぇんだよ」
「……」
急に真剣な声になるフィオンの話に、ベィトは黙って耳を澄ます。
「だから甘えろ。ここにいる奴はみんな、いい奴なんだからな」
「……」
フィオンの言葉に、ベィトは大人しく頷く。それを感じ取ったらしいフィオンはフッと笑い、ベィトの頭をポンポンと撫でる。
「おら、奥行くぞ」
「え？ぼ、僕はそこら辺のソファーで…」
「アホか。餓鬼はちゃんと毛布にくるまって寝ろ」
「が、餓鬼……っ」
先程からフィオンはベィトのことをずっと『餓鬼』と言っている。それが少し気に入らないベィトは、フィオンに手を引かれながら少しむすっとする。
「ザージ、今日からこいつと一緒に寝てくれな」
フィオンが入った所は、いつの間にここに来ていたのか、ザージが一人で寝ているちょっとした部屋のような所だった。廃墟だが元は何らかの建物であったのだろう、少しだがこういった部屋も残っているようだ。

「……」
ザージはベィトを見つめて、無言のまま頷いた。
「じゃあベィト、朝になったらきちんと起きろよ」
「う、うん」
「じゃあな、ザージ、ベィト。おやすみ」
「お、おやすみなさい…」
「……」
フィオンは二人に挨拶を済ませると颯爽と出て行った。
「……」
「……」
部屋に二人取り残されたが、ザージ自体が無口であるため会話がない。ベィトも先程会ったばかりのザージに何を話せばいいのか分からず、結局沈黙が訪れる。
すると
「っ！？」
「……」
ザージがベィトの腰に抱き着いてきた。ザージは目を閉じていて、そのまま眠りにつくようだ。
「ざ、ざー……じ？」
「……おやすみ、ベィト」
「！」
ザージはそれだけ言うと、寝息を立てて夢の世界へ旅立った。
いきなりザージが口を開いたことに驚いたベィトだが、幼く可愛らしいザージの寝顔を見て微笑んだ。
「おやすみ、ザージ」
ザージにそう囁くと、ベィトも眠りについた。

第5話　振り回されて、守られて（後書き）

もんのすごい久々の投稿。

中々思うように書けないなー。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6429j/

愛しいキミとの鬼ごっこ

2011年10月22日02時09分発行